



# アカシア俳句会



令和五年

春季俳句会

「句評」

「春」の季語を含む作品一〇五句

## 一、「特選句」 選定句評

○泣き腫らし担任もまた卒業す

藤井光正

◆涙にくれた小学校の卒業式 担任の先生と別れを惜しんだあの頃の素直な気持ちを思い返しました

西村敏治

○ブランコにかわりばんこの風が吹く

藤井光正

◆戦争もない春ののどかさが伝わります 少子化に歯止めがかり世界中がこのようになって欲しい

戸堂博之

○思ひ出は茫々金剛春霞

中野亘子

◆金剛は特別の山 思い出が茫々です 春霞の中 私も金剛の前にじっと立ちます

加龍恵子

◆七期の三丘生にとって金剛登山は懐かしい思い出であり 金剛山を見て育った故郷の山です

都 福仁

○父母の齢超へて今年の花衣

中野亘子

◆八十路半ばふと父母を思う 身も心も健やかでいる今を感謝 その心を季語「花衣」に委ねた描写が素晴らしい

前田秀一

○春の月見上げて転ぶ芝の庭

中野亘子

◆私も毎日のように月を楽しんでおりますが やはり足元おぼつかなく共感いたしました

吉田以登

○春仕度国守る道歩むのか

西村敏治

◆進路選ぶ春 「国守る道を…」 親心甚く胸に響く 御句にて全霊で平和への寄与をの想い更に強く 多謝

網 佑子

○はや桜三日見ぬ間に散りそめし

西村敏治

◆桜の花が咲いて 春だなと思つて3日後 もう花が散り始めたかと なんととはかない花だと思つ

楠野圭子

○鳩の湖数万の花吹き入るる

佐藤茂弘

◆湖に沿つて咲く爛漫の桜 風が吹くと豪華な花吹雪が出現し 湖上は一面ピンクに染まる スケールの大きな句です

中野亘子

○年毎に朽ち逝く梅に少し花

都 福仁

◆梅をわが身に置き換えて 妙に納得してしまいました 「少し花」が嬉しかった

三木徳彦

○プチプチと雪解け刺さる陽の光

都 福仁

◆春の陽光に溶けて行く雪を プチプチという音に託して表現されているところに面白味を感じました

元永悦子

◆そうそう プチプチですよね あの音を 陽の光の刺さる音と表現されたのが素晴らしいとおもいました

野本展子

○校庭を駆ける子追ひて花吹雪

加龍恵子

◆明るく元氣さわやか この季節のいちばんいいところをとらえている 「校門」の句と迷ったがどちらにも通じますね

山家由紀

○春うらら剪定バサミの打つビート

野本展子

◆小春日和のひとつとき お庭の一隅で 植木屋さんのハサミの音だけが・・・とても良い句です

吉澤志保子

○綿ぼうし今か今かと風を待ち

野本展子

◆飛びそうで飛ばない綿胞子 春へのやさしい風 強い風を待っているのはタンポポでしようか 作者でしようか

佐藤茂弘

○鶯や樹林華やぎホーホケキョ

前田秀一

◆高野山奥之院でホーホケキョの美しい声を聞いた時を思い出し同じ気持ち・・・

岩崎悦子

○花の旅地酒ほろ酔ひ長談義

前田秀一

◆男同士二人か三人の旅でしようか 拘りの人生を振り返りながら長談義するなんて羨ましい光景です

藤井光正

二、「編集後記」

格子窓日差し和らぐ秋気配

今西 邦一

金剛俳句会 第四十八回 (平成三十年九月十五日) 投句作品

金剛俳句会に参加されていた今西邦一さんが二月初旬ご逝去されたとお知らせを受けました。令和元年ころから体調を損なわれアカシア俳句会にはご辞退がありました。

謹んでお悔やみ申し上げます。



◆「土生重次師俳句論」(\*\*)

\* \* \* 小川誠二郎編二〇〇一『抄録・重次俳句論―土生重次、かく語りき―』(復刻) 扉俳句会運営委員会

《今回の学び》

俳句は「今」をとらえた文芸である

百三十七頁

俳句とは現在をとらえる文芸だと思ふ。バックミラーに写る世界を描いたり、フロントガラスに広がる世界を描いたりではないんじゃないか。何となれば常に時間の流れに乗って進んでいるからだ。そこに一瞬のブレーキをかけて「今」をとらえ、描き出すのが俳句ではなからうかと思ふわけである。

すぐに去っていく「今」をとらえることのできる文芸が俳句だと考えていただいて間違いないと思う。

俳句は「何を詠うか」ではなく「いかに詠うか」だ

九十六頁

たるみたる糸に迷いて武将風

堀 惇子

威風堂々たる「武将風」も迷うことがある。右に左に体をゆさぶって落ちそうになる。それもおのれを支えている、いや捉えている糸がたるむことによつてである。武将風の大空の威厳もしよせん細い糸によつて保っているのだ。

刈り込みの効いた表現を得て鮮明な句になって印象が深い。「武将風」という俳句によく登場する素材に、フレッシュな姿を与えた手柄。「何を詠うか」ではなく、「いかに詠うか」が大切の見本のような句である。

《これまでの学び》

既発行『句評』『編集後記』掲載

◇「俳句は叙事詩である」 季語―非凡の一節を支えるもの

令和五年『冬季・新年俳句会』

◇「俳句はモノに託して心を詠う文芸である」

令和四年『秋季俳句会』

◇「俳句は心や情を直接的に詠ってはならない」

令和四年『秋季俳句会』